

〈特集「ヴォイスとその周辺」〉

イタリア語のヴォイスとその周辺 Voice and related matters in Italian

久保 博
Hiroshi Kubo

東京外国語大学非常勤講師
Part-time lecturer, Tokyo University of Foreign Studies

要旨: 本稿は、特集「ヴォイスとその周辺」のアンケートに沿って、イタリア語のデータを提供することを目的とする

Abstract: The purpose of the present paper is to give data of voice and related matters in the Italian language, based on the questionnaire of the special topic of this volume.

キーワード: ヴォイス、イタリア語

Keywords: : voice, Italian

1. はじめに

イタリア語の伝統的な文法では、自動詞は直接目的語をとらない一項動詞、他動詞は直接目的語をとる二項動詞と説明される。実際イタリア語においては自他の対立は形態論には明示されない。ただ山本(1995, 2010)が様々な機会述べているように、現在イタリア語の文法研究では伝統的な意味での自他の対立だけでなく、伝統的に自動詞と呼ばれていた動詞の中に、実は二種類の動詞があることを考慮しなければならない。

ここでこの問題を掘り下げることにはしないが、ごく簡単にイタリア語における動詞の振る舞いを理解するうえで、以下様に、二項動詞と二種類の一項動詞という三つのタイプの動詞があることを念頭に置いていただきたい。

- 1 二項動詞 = 他動詞 (伝統的に他動詞と呼ばれていたものと同じ)
- 2 一項動詞 1 = 非能格動詞
- 3 一項動詞 2 = 非対格動詞

さらに、非対格動詞の中に再帰代名詞を伴うものと伴わないものがある。再帰代名詞を伴うか伴わないかについては、規則性がないといわれている。

ある動詞が「非能格動詞」であるとか「非対格動詞」であるとか決まっているのではなく、同じ動詞でも「非対格的」と解釈されたり「他動詞的」と解釈されたりする。



本稿の著作権は著者が保持し、クリエイティブ・コモンズ 表示 4.0 国際ライセンス(CC-BY)下に提供します。
<https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed.ja>

例えば、イタリア語は pro-drop 言語であり、しかも文の主語を動詞に後置出来るので、*apre la finestra* (open the door) という文は、「窓が開く」とも「(誰かが) 窓を開ける」とも解釈でき現在形では全く同じ形の文になるが、近過去にすると助動詞の選択に違いが見られる(他動詞の時は動詞 *avere* 「持っている」、非対格動詞の場合は *essere* 「...である」)。ちょうど本アンケートの例文も過去に起こった出来事として描かれているものが多いので、非対格動詞と他の動詞の対立がいろいろなところで現れる。

非対格動詞を仮定することで、一見関係がなさそうな現象も統一的に説明できるのだが、これについては山本 (1995, 2010) を参照してほしい。

今回のアンケート調査は、イタリア語を対象とし、例文の作成にあたっては、イタリア人 (1987 年生まれ、フリウリーヴェネツィア・ジューリア州ウディネ県出身) のネイティブ話者 1 名の協力を得た。いくつかの例文については、複数の異なるタイプの文を提示している。

2. アンケート回答

(1-a) (風などで) ドアが開いた。

È aperta la porta
is opened the door.NOM

(1-b) (彼が) ドアを開けた。

Lui ha aperto la porta
he.NOM has opened the door.ACC

(1-c) (入り口の) ドアが開けられた。

イタリア語の受け身の構文は、*essere*+過去分詞で構成されており、近過去の場合 *essere*+*stato*+過去分詞となる。

La porta è stata aperta
the door.NOM is been opened

(1-d) ドアが壊れた。

Si è rotta la porta
PRON.REFL.3.SG is broken the door.NOM

(2) 私は (自分の) 弟を立てさせた。

イタリア語の使役の構文では、被使役主を表すのに三つの可能性がある。非対格動詞と非能格動詞、つまり伝統的な意味での自動詞では、被使役主は使役の構文全体の直接補語として現れる。他動詞の場合、被使役主は前置詞 *a* を伴い与格として現れる。他動詞の中でも、「与える」「送る」など文中にすでに与格が存在する場合、一般的に「～から」と訳したり、受け身の文における動作主を表したりするために使われる前置詞 *da* を伴って現れる。再帰動詞を使役にすると、再帰代名詞は現れない。また、日本語の「落ちる」と「落とす」という対立があるが、イタリア語で「落ちる」を意味する *cadere* には、その対となる他動詞が存在せず、自他の交替のために使役の構文を用いる。

前者は物理的に力を加えて立たせたのに対し、後者は「はい、立って」など声をかけ、本人自身の力

で立ち上がらせる場合に用いる.

a.

(Io) ho alzato mio fratello
(I.NOM) have got-up my brother.ACC

b.

(Io) ho fatto alzare mio fratello
(I.NOM) have made get-up my brother.ACC

(3) 私は（自分の）弟に歌を歌わせた.

既に述べた通り, 直接目的語がない場合は, 被使役主が使役の構文全体の直接目的語として現れ, 直接目的語がある場合は, 与格として現れる.

a.

(Io) ho fatto cantare mio fratello
(I.NOM) have made sing my brother.ACC

b.

(Io) ho fatto cantare “O sole mio” a mio fratello
(I.NOM) have made sing “O sole mio”.ACC to my brother

(4-a) (遊びたがっている子供に無理やり) 母は子供をパンを買いに行かせた.

イタリア語には使役動詞は二種類ある. fare と lasciare があり, とくに後者は「放任の使役」と呼ばれている. 細かく見てゆくと, この二つの使い分けおよび解釈は一筋縄でいかないのだが, おおきな違いとして lasciare の場合は強制使役と用いることができない. fare は強制使役と許可使役両方の意味で用いることができる.

La madre ha fatto andare suo figlio a comprare del pane
the mother.NOM has made go her son.ACC to buy some bread.ACC

(4-b) (遊びに行きたがっているのを見て) 母は子供に遊びに行かせた.

La madre ha fatto / lasciato uscire il figlio
The mother.NOM has made / let.PAST.PTCP go.out the son.ACC

(5-a) 私は弟に服を着せた.

(Io) ho vestito mio fratello
(I.NOM) have wear my brother.ACC

(5-b) 私は弟にその服を着させた.

(Io) ho fatto vestire mio fratello
(I.NOM) have made wear my brother.ACC

(6) 私は弟にその本をあげた。

イタリア語では、日本語と違い「やりもらい」に関する動詞を用いて恩恵の授受を表すことはない。その代わりに、「恩恵の与格」とよばれる間接目的語を用いることがあるが、通常の与格と形が完全に同一であるため、わかりにくい場合が多い。

(Io)	ho	regalato	il	libro	a	mio fratello
(I.NOM)	have	presented	the	book.ACC	to	my brother

(7-a) 私は弟に本を読んであげた。

イタリア語においては、日本語の授受動詞の様に助動詞的に使えないが、その代わりに間接目的語で誰が受益者なのかを示す。「恩恵の与格」のほかに、英語の for に相当する意味もある前置詞 “per” を使うこともできる。

(Io)	ho letto	un	libro	ad alta voce	per / a mio fratello
(I.NOM)	have read	a	book.ACC	at high voice	for / to my brother

(7-b) 兄は私に本を読んでもらった。

Mio fratello	mi	ha	letto	un	libro
my brother.NOM	me.DAT	has	read.PAST.PTCP	a	book.ACC

(7-c) 私は母に髪を切ってもらった。

Io	mi	sono	fatto	tagliare	i	capelli	da mia madre
I.NOM	PRON.REFL.1.SG	am	made	cut	the	hairs.ACC	by my mother

使役の fare を再帰代名詞と用いた構文では、不定詞の意味上の主語を示すのに常に da が用いられる。

(8-a) 私は（自分の）体を洗った。

伝統的な文法記述では、再帰動詞に 4 つの用法があり、ここではそのうちの三つの用法の例を見ることができる。「自分自身」を表す代名詞が lavare 「洗う」の直接目的語の場合、体全体を洗うという意味を表す。

a.

Io	mi	sono	lavato
I.NOM	PRON.REFL.1.SG	am	washed

しかし、「お化粧をした」という場合、一般的に考えて顔しか化粧しないため、体全体という意味にはならない。

b.

Io	mi	sono	truccata
I.NOM	PRON.REFL.1.SG	am	made.up

(8-b) 私は手を洗った.

lavare を使って体の一部を特定したい場合は, 体の部位が直接目的語になる. 再帰代名詞はこの場合間接目的語になる.

Io mi sono lavato le mani
I.NOM PRON.REFL.1.SG am washed the hands.ACC

(8-c) 彼は手を洗った.

Lui Si è lavato le mani
he.NOM PRON.REFL.3.SG is washed the hands.ACC

(9) (自分のために) 私はその本を買った.

ここで再帰代名詞は, 間接目的語である. 前置詞 per 「・・・のために」を使って言うこともできるが, 「他の人ではなく自分のために買った」というニュアンスになる.

a.

Io mi sono comprato il libro
I.NOM PRON.REFL.1.SG am bought the book.ACC

b.

Io ho comprato il libro per me stesso.
I.NOM have bought the book.ACC for myself

(10) 彼らは (その人たちは) (互いに) 殴り合っていた.

再帰動詞を使って「相互的に・・・を行う」という意味にすることができる. 相互的な意味で再帰動詞を使う場合, 当然ながら主語は複数形か単数形であっても意味上複数と解釈できるものでなくとはならない.

Loro si picchiavano
They.NOM PRON.REFL.3.PL was.hitting

(11) その人たちは (みんな一緒に) 街へ行った.

Loro sono andati in città insieme
they.NOM are gone to city together

(12) その映画は泣ける (その映画を見ると泣いてしまう).

Il film fa piangere
the movie.NOM makes cry

イタリア語では, 感情を表す動詞を使役動詞と組み合わせることで「その映画は泣ける」のような映

画の性質を表す文を作ることができる。

(13-a) 私は卵を割った。

イタリア語では意図的であるか意図的でないかは動詞もしくは補助的な動詞に含意されていない。したがって、(13-a) も(13-b)も基本的に同じ表現になる。

Io ho rotto l' uovo
I.NOM have broken the egg.ACC

(13-b) (うっかり落として) 私はコップを割った／割ってしまった。

Io ho rotto il bicchiere
I.NOM have broken the glass.ACC

(14-a) きのう私はコーヒーを飲みすぎて (飲みすぎたので) 眠れなかった。

イタリア語では *riuscire* と *potere* の使い分けが重要になるのだろうが、情報提供者によると両方とも *riuscire* も *potere* も可能である。

眠ろうと努めたが、眠れなかった場合

a.

Visto che io avevo bevuto troppo caffè, (io) non sono riuscito a dormire.
Because that I.NOM had drunken too.much coffee.ACC (I.NOM) not am succeed to sleep

コーヒーの影響で眠れなかった場合。

b.

Visto che io avevo bevuto troppo caffè, (io) non ho potuto dormire
Because that I.NOM had drunken too.much coffee.ACC (I.NOM) not have can sleep

(14-b) きのう私は仕事がたくさんあって (たくさんあったので) 眠れなかった。

義務感に駆られて仕事をやり続けた場合

a.

Visto che io avevo tante cose da fare ieri, (io) non ho potuto dormire.
Because that I.NOM had many things.ACC to do yesterday, (I.NOM) not am can to sleep

あるところで切り上げて、寝ようとしたが、気になって眠れなくなった場合。

b.

Visto che io avevo tante cose da fare ieri, (io) non sono riuscito a dormire
Because that I.NOM had many things to do yesterday, (I) not have succeed to sleep

(15) 私は頭が痛い。

二つの構文があり、一方は動詞 *avere* を使い、主語を痛みを感じる人として用いる。直接目的語に「...の痛み」を意味する *mal di ...* を用い、*...* に体の部位を入れる。もう一つは痛みを感じる主体を間接

目的語としてとり, 痛みを感じる部位を文の主語としてとる. 動詞は “fare male”か “dolere”を用いる.

a.

Io ho mal di testa
I.NOM have headache.ACC

b.

Mi fa male la testa
me.DAT hurts the head.NOM

c.

Mi duole la testa
me.DAT hurts the head.NOM

(16) 彼女は髪が長い.

Lei ha i capelli lunghi
she.NOM has the hair.ACC long

(17-a) 彼は (別の) 彼の肩をたたいた.

a.

Lui gli ha dato un colpo sulla spalla
he.NOM him.DAT has given a knock.ACC on.the shoulder

b.

Lui gli ha picchiato la spalla
he.NOM him.DAT has hit.PAST.PTCP the shoulder.ACC

(17-b) 彼は (別の) 彼の腕をつかんだ.

a.

Lui gli ha preso il braccio
he.NOM him.DAT has taken the arm.ACC

b.

Lui l'ha preso per il braccio
he.nom him.acc.has taken by the arm

(18-a) 私は彼がやって来るのを見た.

vedere や sentire など視覚や聴覚に関する動詞は「知覚構文」をとることができ, “知覚動詞+不定詞+目的語”となり, 目的語が不定詞の意味上の主語を表すことができる. また **che** で導入して従属節もとることができる. 不定詞を使った場合は, 不定詞の動詞で示されている事態を最初から最後まで見ていたというニュアンスになる.

不定詞をもちいた場合, 使役構文とは違い, 不定詞の意味上の主語は知覚構文全体の直接目的語にな

る。直接目的語が二つ現れてしまう場合、不定詞の意味上の主語を、知覚動詞と不定詞の間に置く。

a.

Io l' ho visto arrivare
I.NOM him.ACC have seen arrive

b.

Io ho visto che Lui arrivava
I.NOM have seen that he.NOM arrived

(18-b) 私は彼が今日来ることを知っている。

sapere 「知っている」のような動詞では知覚構文をとることはできない。

Io so che lui viene oggi
I.NOM know that he.NOM comes today

(19) 彼は自分（のほう）が勝つと思った。

pensare 「思う」が主節の動詞で、主節の主語と従属節の主語が一致する場合、前置詞 *di* で不定法の従属節を導入し、従属節の主語を明示しないことが一般的である。しかし、(19)の例のように従属節の意味上の主語を「～自身が」などで強調する場合は、従属節で *di* + 不定詞の構文を用いることはできない。

Lui pensava che avrebbe vinto lui stesso
he.NOM thought that would.have won himself

(20-a) 私は（コップの）水（の一部）を飲んだ。

直接目的語にもものが来る場合、代名詞としていわゆる「部分代名詞」*ne* を使うことができる。

Ne ho bevuto un po' dal bicchiere
PARTIVE.PTCL.ACC have drunken a.bit.ACC from.the glass

(20-b) 私は（コップの）水を全部飲んだ。

「全部」をといるときには *ne* は使うことはできない。

Io ho bevuto tutta l' acqua del bicchiere
I.NOM have drunken all the water.ACC of the glass

(21) 彼は肉を食べない。

Lui non mangia la carne
he.NOM not eat the meet.ACC

(22-a) 今日は寒い.

Oggi fa freddo
today does cold.ACC

イタリア語では, 気候に関する動詞は一般的に, 主語が明示されない.

(22-b) 私は (何だか) 寒い (私には寒く感じる).

Adesso io ho freddo
now I.NOM have cold.ACC

(23) 人がとても多かったことに私は驚いた.

stupire, sorprendere 「驚かせる」などの他動詞を用いる(23a)か, もしくは stupirsi, sorprendersi 「驚く」を使役の構文で用いる(23b)ことで表現できる. 再帰動詞を使役の構文で用いると, 再帰代名詞 si は現れない.

a.

Il fatto che c'era tanta gente mi ha stupito
the fact that there was many people.NOM me.ACC has stuned

b.

Il fatto che c'era tanta gente mi ha fatto sorprendere
the fact that there was many people.NOM me.ACC has made stun

(24) 雨が降り始めた.

Ha cominciato a piovere
has started to rain

(25) この本はよく売れる.

Si vende tanto quel libro
itself.PASS sell much that book.NOM

受け身ではないにもかかわらず, 直接目的語が主語になる現象はイタリア語で広くみられる. これはこのアンケートの冒頭で説明した非対格動詞と深くかかわっているので, この問題について深めたい場合は, 山本(1995, 2010)を参照されたし.

参考文献

- 山本真司.1995. 「イタリア語の中動態について (その1)」『東京外国語大学論集』50, pp.51-59.
山本真司.2010. 「イタリア語の中動態について (その2)」『東京外国語大学論集』80, pp.273-292.

執筆者連絡先 : hiroshi80@tufs.ac.jp

原稿受理 : 2022 年 1 月 6 日